



上町にある、佐川文庫庫舎の前に立つ広井勇工学博士像の写真に、北海道小樽港の写真を合成したものです。写真左手前が北防波堤です。

PICK UP CONTENTS

- 広井勇博士の軌跡.....2
- 高北国保病院.....6
- かわせみ.....7
- おしらせ.....11
- ボタニカルニュース.....22
- さかわ観光協会.....23
- 地質館だより - 桜座 Information.....24
- 青山文庫だより.....25
- 佐川町立図書館さくと.....26
- さかわ学校だより - 黒岩小学校.....27

近代土木の先駆者
いさみ
広井勇博士の軌跡

佐川村で誕生し、名教館で学んだ広井勇工学博士が築港に関わった小樽港の防波堤施設（北防波堤・南防波堤・島防波堤の3所）が、100年以上後の現在も激浪に耐えていることなど、技術的に優秀なもの、歴史的に価値が高いものとして令和8年1月15日、国の重要文化財に指定されました。

このことを記念して広井博士の生涯、功績など数回にわたりご紹介していきます。



上郷にある博士の生誕碑です。ツルハドラックさん、33ラーメンさんの北側の山際に位置しています。

広井家の系譜（系図）

広井勇（以下、博士）は、文久2（1862）年9月2日、土佐藩筆頭家老深尾家の家臣・広井喜十郎の長男として深尾領内の内原（現佐川町／上郷）に生まれました。博士がどのような家に生まれたかを探るには、広井家の系図を参照することが一番ですが、博士の死後に業績顕彰を目的として編纂された『工学博士広井勇伝（以下、伝記）』によると、広井家に伝来していた系図は佐川を離れる際に預けた親戚の家が火事になって焼失したそうです。

後になって、先祖の書いたものや記録などを調べて自ら系図を作成したそうです（以下、自筆系図）が、伝記には自筆系図の他に、筆写不明のくずし字で書かれた系譜（以下、広井家系譜）も広井家に現存していたと書いています。この伝記が執筆された昭和初期には、広井家の系図が2点あったということになりますが、現時点では所在不明です。もしかしたら、ご子孫の家に伝来しているのかもしれませんが、確認が取れていません。

自筆系図は、博士が明治29（1896）年に作成したものです。伝記に転記されましたので、原本がなくとも内容を知ることができました。恐らく、現存していた過去帳を参照して作成したものと思われ、続柄がわかる系図に名前（通称）・死去年月日・生母の名前や享年（死去時の年齢）を添えている、とてもシンプルなものでした。他方の広井家系譜については、伝記の執筆に参照したと文中にあり、参照部分の内容から、各当主の事跡がある程度記載された資料（一般的な系譜）であったと推測できます。

多くの情報が記載されている広井家系譜の方が、先祖の事跡をたどるには適しているのですが、わざわざ自分でシンプルな系図をまとめたことに注目すると、博士の

先祖や家族に対する想いをうかがうことができます。

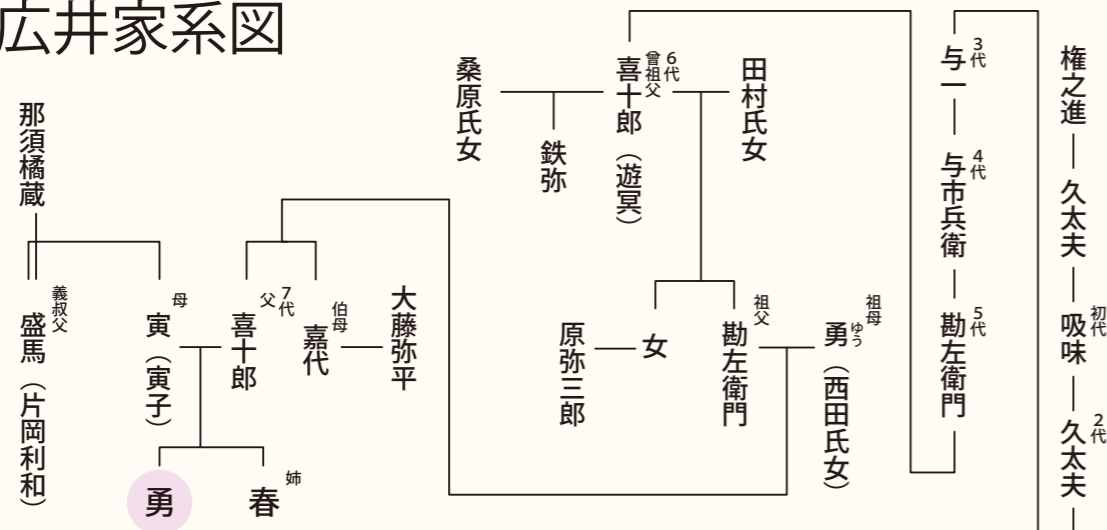
広井家系譜のような江戸時代から各家に伝来した系譜や家譜は、各家の当主の事跡が列記されるものなので、その家に生まれた女性の情報はほぼ収録されません。名前が記載されることも珍しく、単に「女」と表記されることが多いです。自筆系図は、祖父の姉妹（大おば）のみ「女」とありますが、父の姉（伯母）や自分の姉にはきちんと名前が記載されています。なお、大おばについては、他家に嫁いでいるため過去帳に記載されておらず、名前がわからなかったのではないかと思えます。

博士が系図を調べはじめた時期については、「先祖の記録を参照しながら作成した」と伝わっていますので、ドイツで学位を取得して帰国し、札幌農学校の教授として北海道に転居した明治22（1889）年9月以降ではないかと思っています。明治23（1890）年7月には伯母が死去しますので、先祖について知っている近い家族は母か姉しかいない状況となります。他の親戚に問い合わせようとしても、皆が佐川に住んでいるかどうかわからない時期ですので、簡単ではなかったと思います。それゆえ「女」と書いたのではないのでしょうか。

自筆系図の序文から、系図がまとめられたのは明治29年10月だとわかります。ただし、それ以降に生まれた子供の情報も記載されていますので、子供については誕生後に追記したのでしょうか。

明治時代になって江戸時代の家族の在り方が大きく変化したことが大きかったかもしれません。また、外国で暮らした経験や博士がキリスト教徒であったことも影響しているかもしれません。幼少期に先祖が長年住んだ土地を離れ、それに伴い親戚付き合いも薄くなった博士にとって、家族のつながりを明示するこのシンプルな系図は、自分が生まれた家の歴史を系図に託して遺そうとした意図があったのではないかと思えてなりません。

広井家系図



この系図は、高知県立高知城歴史博物館蔵の「四等士族上席年譜」と広井博士が復元した系図『工学博士広井勇伝』収録を基本とし、佐川町に現存する広井家の墓からわかる情報と、『佐川町史』などで補って作成しています。

もっ一つの系譜からわかること

自筆系図をまとめた際の博士は把握していなかったと思いますが、実は、広井家の系譜はもう1つありました。その系譜は、高知県立高知城歴史博物館に収蔵されている「家譜指出(以下、指出)」という資料で、明治3(1870)年7月に当時の広井家当主であった父・喜十郎が高知藩に提出し、後に他家の系譜と共に「四等士族上席年譜」としてまとめられたものです。博士が所持していた広井家系譜を見ることができませんので、現在の我々が確認できる唯一の系譜となります。

指出によると、広井家の先祖は長宗我部氏の家臣でしたが、主家の没落により浪人となり、いつの頃か佐川の斗賀野に移ってきたそうです。佐川領主家に仕官したのは江戸時代のはじめ頃とい、佐川広井家の元祖となる吸味が2代佐川領主・深尾重昌に茶道として召し抱えられたそうです。

当初は軽格(下士)でしたが、徐々に家格を上げて、5代勘左衛門の時には騎馬(佐川の武士たちの中では中流にあたる)となっており、知行(給料として与えられた土地や俸禄のこと)も30石を与えられています。

曾祖父にあたる6代喜十郎(遊冥)は、高知郡(高知城下にあった領主家の屋敷)の留守居をつとめるなどの経歴を持ちますが、後に就任した名教館の教授として名を知られており、佐川を代表する学者・伊藤蘭林の師でもありました。

この曾祖父の代に、祖父・勘左衛門が死去したため、7代当主の座に若年であった父・喜十郎は、幕末動乱の中、容堂(前土佐藩主・山内豊信)の上洛に随行する10代佐川領主・深尾重先に同行するなど、深尾家家臣としての役目を果たしていきませんが、明治元(1868)年12月に何らかの不幸事を起こし、息子である博士に当主の座を譲ることとなります。とはいえ、これは一時的なもので、半年もたたないうちに許されて父が当主に復帰します。

明治2(1869)年6月に、土佐藩が高知藩となると、それまでの土佐藩の体制が大きく変わり、佐川領は消滅します。領主家もその家臣たちも高知藩知事となった山内豊範(最後の土佐藩主でもありました)のもと再編成されることになりましたので、高知城下に移り住むこととなります。見ず

知らずの土地への移住に加え、広井家に限ったことではありませんが、家禄(給与)も大幅に減らされました。このような厳しい状況下、明治3(1870)年10月に父が死去します。そのため、わずか9歳の博士が当主として

博士にとっての明治維新

私が学生時代に教科書で習った明治維新は、「江戸幕府が倒れ江戸時代が終わり、天皇親政の明治時代が始まる」というような印象だったように記憶しています。さらに、明治4(1871)年7月の廃藩置県により高知県が成立するまでの間の歴史に注意を払うことがなかったような気がします。同じような方が多いのではないかと思いますが、その影響でか、「明治維新により土佐藩が高知県になった」と認識している人が多いのではないのでしょうか。

博士がどのような歴史的背景の中で幼少期や青年期を過ごしたかを知っていただくため、当時の歴史を少し解説してみます。年表的な羅列が続きますが、西暦を気にしながら歴史の流れを確認してみてください。

まず、明治政府(新政府)の成立は、慶応3(1867)年12月の王政復古

広井家を背負うこととなりました。指出が高知藩に提出されたのが、父死去の直前の7月で、当時、数馬と名乗っていた博士が父の勤めを引き継いだことが追記されています。

の号令とされており、直後の鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗れたことにより、各藩は新政府に味方する勢力と、幕府に味方する勢力とに分れていきます。幕府勢力と戦って、自分たちの勢力下に収める必要があった新政府にとって、味方の存在は重要ですので、いろいろと優遇していきます。土佐藩は新政府側の立場をとりましたので、高知藩として新しい名称に変え、江戸時代とは異なる体制を採りますが、その内情は土佐藩がほぼそのまま温存されたといえるでしょう。高知藩を運営する代表者である初代高知藩知事は、最後の土佐藩主が就任していることから、温存の状況がうかがえるでしょう。

高知藩の成立は明治2(1869)年6月ですが、これに先んじて、正月には版籍奉還(土地と人民を天皇に還すこと)の建白書を朝廷に提出してお

り、3月には藩政の大改革を布告して新しい体制に移行する準備をはじめていきます。これは、江戸時代の地方知行制(与えられた領知から年貢として収入を得る制度)を廃止して給与制に変更するということです。つまり、江戸時代を通じて機能していた社会システムの崩壊がはじまったのです。

これを広井家にあてはめてみると、「高知藩の成立により佐川領が消滅し、旧土佐藩に所属していた他の武士たちと共に、新しい高知藩の支配下に再編成される」ということとなります。高知藩の配下としては、四等士族上席に位置付けられ、9石の俸禄(給与)を与えられました。知行30石と俸禄9石は単純に比較できませんが、大幅に減っていることは容易に想像できるでしょう。

また、この変化は所属と給与が変わったに留まりません。江戸時代は身分によって収入が得られていた風が、職に就いて収入を得るといふ風に

変化したということになります。今の我々には当たり前のことではありませんが、江戸時代を生きた人々にはびっくりするほどの変化です。

しかも、この変化の過渡期に父が死去してしまいます。わずか9歳の博士が当主となったタイミングでは、父から引き継いだ俸禄が当てにできななしょうが、約9カ月後の明治4(1871)年7月には廃藩置県となり、高知藩が消滅して高知県が誕生します。これにより、江戸時代の藩(大名領)が完全に消滅しますので、新政府による近代的な中央集権国家が成立したといえます。

つまり、江戸時代の封建制の延長で構築された高知藩の体制が否定されることとなりましたので、博士が家計を支えることは困難な時代に入ります。ここで採れる博士の選択肢は多くなかったでしょうが、祖母と母が内職をして家計を支えることとして、博士には勉強に専念させたといえます。

学問に励み札幌農学校へ

佐川時代は名教館で学んでいた博士が、高知城下でどのように学んでいたかは不明ですが、明治5(1872)年の夏に、明治天皇の侍従職をつとめ

る叔父・片岡利和(母の実家に養子に入り継いだ人物)が帰郷した際に直談判して、東京で学べることになりました。

11歳で親元を離れた博士は、叔父の家で書生として居候して、英語・数学・漢学などの私塾に通わせてもらいます。この当時、英語の習得はとても重要で、一気に日本の中へ流れ込んできた西洋文明(先端知識や技術)を学ぶためには、外国人教師の授業や参考書を理解する英語力が必要でした。身分により収入を得ることが出来なくなつたこの時期、多くの武家の子弟たちは学問を深めて先端技術を身に付け、新しい時代に必須の技術者になる道を選ぶことも身を立てる1つの選択肢でした。

また、当時の日本は、鎖国下から一挙に国際化したため、「世界の中の日本」を意識しはじめ、近代化という名の西洋文明の受容が急がれた時期でもありました。近代化の諸々について、ほとんどを外国に学ばなければならぬい時期ともいえます。そのため、高い英語力が求められますので、国も英語習得のための学校を開きます。

博士も明治7(1874)年3月に東京外国語学校英語科(後の東京英語学校)に入学し、後に工部寮(後の工部大学)予科へ転入します。この工部寮は、日本の産業を担う人材育成のために国が設けた高等教育機関で、専門教科を習う大学校と、大学校に入学す

るために勉強する小学校(予科)がありました。博士は、私費生として工部寮付属小学校に転入します。叔父が援助してくれたのでしよう。伝記によると、博士はここで必死に勉強しながら国のお金(官費)で学べる学校を片っぱしから受験したといえます。しかし、ほとんどの学校に合格したもの、入学規定に定める年齢に達していなかったため入学できなかったそうです。早くから自立を目指した博士の姿勢を感じるエピソードです。このような状況下、明治10(1877)年に、札幌農学校が工部大学予科や東京英語学校の上級生に対して2期生の募集をかけます。入学は7月からなので募集はその少し前だったと思います。入学時の博士の実年齢は15歳10カ月(数えでは16歳)ですので、入学条件の満17歳以上を満たしていません。先に述べたように、過去に年齢を満たせず官費学校に入学できなかった経験を重ねていた博士は、ここで年齢を詐称して(嘘をついて)札幌農学校の2期生として入学します。

(青山文庫 藤田有紀)